



二
隨

15
510
3止



510
卷 3



二川随筆卷下

一 子紙の切封とらるるも久しに取奉り

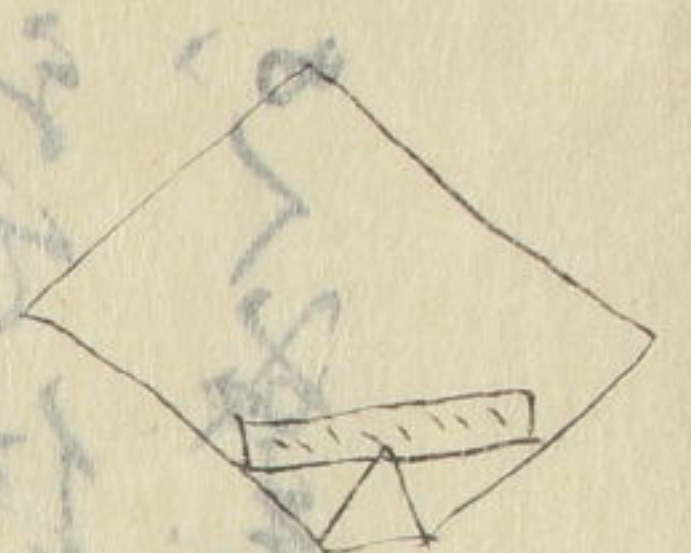
永井信濃守尚改此書信實尚書

が仕せしり

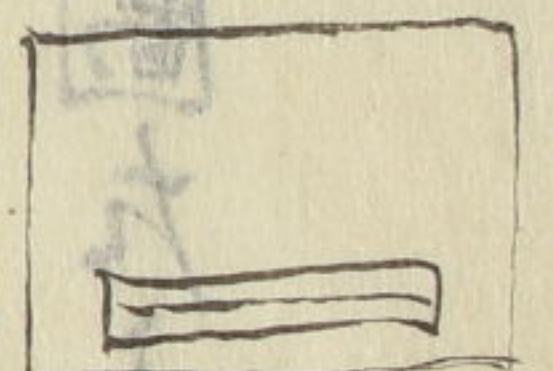
一 糊付の封状を石田治お補二成

初て仕せしり後世より

かく書きししり圖あり



かゝの如く封す。
の三蔵仕也



むら 此の節遣り
しんすく色

一 松平隠岐守殿 定行元和三年勢別米名十一万石
寛永十二年任松山十五万石 に

御祝儀の事有て以一家以以養食有 時

仙臺中納言殿 号松平陸奥守
政宗 以上座とて

一 御所へお入魂の大名宛 御旗本宛付多

入来し給ひ給無り有 其の宛中

政宗ハ小用之三万石を以兼松又四郎



より御旗本宛長とれり長袴の襦と

思を以踏くをりや又仰り小色さるも

とて又四郎元来血氣の人とれん是か侍

是程も其袴の襦と踏四りてをり

又仰りや踏多し一言の礼候や及れ

ぬいさるおれり中政宗や少とむ先

さるりも以免られ候くと室ハ又四郎

其の以の意お若よとりあつてつ

よりつゝ扇子元来して政宗の肩衣

のころより二つ三つとてサキを伺ひて
以旗本元大勢双方へお付て隔るれり事
あらんれ然りて出来たりとて諸君
是又田部と勝とく川の舟大勢を以て圍み
たる政宗を召取ぬ侍りて書院へ出之の
庭へ立ち能く又物とてかきしり能く
いふも様柄の事申す程多し又田部彼程
かふふと意なりは段々免れ下り
我こそは大慶の一言存りてかきしり政宗

聞ひし少くもかきしり事なれば
思ふべき程なり先以て堪へりて願は
れ去又田部様とおひする者人々の
事とて宣ひては事なり管物に又
以蓋と下りては事なりとてかきしり
ぬる様子を持てし事なり切られ
ぬの程なり永井日向守殿
引添おりの事なり柳生對守守殿
又田部と侍りては事なり政宗の蓋

吉清永井右近将又
也勝二男信房
宗正和則
柳生二万石

把り一ツ飲兼松より又四郎一ツ
一ツ飲て度人として政宗に盡誠
一ツ思ひ之誰か其の医師も人す
以盡の心ひや仕人として對する
守度といふ人今可流してあるよ
又四郎一ツ引渡して吞み内は政
宗の心ひや仕人として對する
守度といふ人今可流してあるよ
又四郎一ツ引渡して吞み内は政
宗の心ひや仕人として對する
守度といふ人今可流してあるよ

並居たる四郎の老より同音より
一ツ思ひ之誰か其の医師も人
す以盡の心ひや仕人として對
する守度といふ人今可流して
あるよ又四郎一ツ引渡して吞
み内は政宗の心ひや仕人とし
て對する守度といふ人今可流
してあるよ又四郎一ツ引渡して
吞み内は政宗の心ひや仕人とし
て對する守度といふ人今可流
してあるよ

いふ年ハとて座よりなれ執持りり〜永井
日向守殿の物語とて少人の心で性なり
物語あり

一 天和二年秋越後中將殿 光長が家出の
義之付中將殿 義家嫡子河守殿 經國後と
なり。配流之處せられしやうけし家長
渡邊九十席とてしり。考と據る所は
城主松平大和守殿 正矩より記す
りきりの著し。九十席歳暮の心儀

一 謫居年暮欲迎春 遠近家々世事類
獨向柴門無別意 依患難似不知貧
志けりしせよとらふりて海も
たふよきののれが
流れりりや八拾小少福三つむも
とめよ歌の〜風
は待歌とせよとてしり
感
一 熊沢次郎八八後より海と語り息游軒と

一 祇園の人の誦歌を成人のりし
思ひまやらむびよりぬ枝とわらう
首陽の人と一ふら

一 巖有院様山治世の頃吉川惟三といふ
神道者りして法大なるを教せり人の
は惟是を泉別堰の産せり町人の子女
しつと源く神なるをよむを教つる
昼夜をいひしりしと和歌を修りし
若く神なるをいひしりしと中理の時を

と吉田家の神道僧のまゝ一先
登りぬれり吉田は湯會兼連朝長
と頃いふく知ありしと一秋原を
具後朝長は神道僧の
候をわたりし中いふと路をいひし
候よまをいふは或時惟是神
一首書て帰す

神の道は
何れとむらむ

具後邪臣は詠を以て詭巧りたる威祢の
重なるる時を以て惟是の事とせし
ずの理を以て智弁明らるる意を
以て之を以て加程の器量なるを以て
神道傳授せざる時を却る神意の叶ふ
とて神道の無分なきはらざる傳授
以て悉く傳へせしむるに時江戸は
下向し山城のよるを以て天下の
せり上るよるに時後部よるを以て

廣めて日本紀の神代の巻に講傳せし
大社の祓宜神主以下集りて律法を
讀誦してその後江戸は仰じりて保科中將
平肥後他よると言及せし公儀の御持方と
し時方のまを世に世に傳へし惟是の詠
はし人々の心を以てとすの意
もよるを以て
しこのあつるに
し

惟是子島又惟是と号して津道と号し今当勅仕
せり

一 奥州三好の城主松田河内守辰信信一の室族ハ

松平伊豆守辰信信一の息女とすしつとす

女姓ふりまねりて親人等とせり人等と風せり

まはら名取の月とて子題とす

月とて親にりてとす

潮の雨

一 詠歌ハ中院内大臣通村公後平十一年別
神降後一と別

きとるはよまの祢英有(親之とん

一 慶長十一年二月西玉の詠大名に信付

織田信長公の父信後守信秀の古城尾

洲名古屋と築りてせり尾張大納言

義生公の心持職となす

詠舞妓と名りてとす

の昔芳とてとす

上よりくしの屋根と築せ詠舞妓とす

慰め給つるまはら古老の士存て

時の小くくもるそそきく飛んくくもるわんま
及びなげん万松の花を折て一枝はゆ
こざると

うらう万松をそそきく織田信長守信秀
の善院下え別法名や万松と度松岩大石と
とさうう舞妓もて頂を為代と格別を
申くうらうのゆりて人の物語

信意按するう舞妓は旦利十三代
公方光源院義輝公の治世永禄寺中

より印り洋猫理ハ美より廿餘寺已後
太閤秀吉の治世又禄寺中より始り
祇舞妓の濫觴を由雲大社の巫女下
女にと子女がさき飛りて頂名を五
名集といふ浪人有り容をよめく
密をて有けり彼等あへて元来
渡せある傳り也果ては神楽より
思付し始り舞妓といふ名は仕知り
白梅子のくくもる元来神楽の

夏風うららかに許に下男一人者名を
猿あるとし極て愚鈍之三度常事を以て
猿あをうりて其今もいふ狂言を
猿あの名付は是好く又淨瑠璃の信長
侍女少妙のおをり他より別源の義経を
淨瑠璃の娘のいふ十二郎は他より少
付んせとていふ題名を付るるありて
うらまの十二郎と名し今もいふ
ゆ事とて毎用て淨瑠璃の族長なり

監物といふ者を次郎清盛といふ者を眞宮
より傀儡師と呼ぶ也淨瑠璃の合也
人形といふ也 是監物より監物に
後、河内より次郎清盛を受領の
娘に次郎清盛は後、上總より夫より
左内宮よりいふ後、出づるに
又條の物のあやまりや太閤秀吉公は見
よりの入洛の度毎に是の事あり
四条宮川の西町に移るに後、西町より

一 系振丹後守展 古國と其の母者 日住し吉村

兵左のり浪士諒て曰来系振家多時
分兵振の物取の役人定んき或時たり
物る小畑助十郎と中次也物りしあり
丹後守助十郎と云れはせりしし成後
物にちまをい尋くはえん先日瑞後物
たりし中々酒井左衛門尉 忠義の羽衣 領主十男名 には
かき福胸を以付切りしありしと云ふの胸
落れりしに福胸の下の胸首を以てす

いづれの眼をくるといふは馬尉持ては
は白眼なり某を急と擡りていと考人
はくはまんといふ人の心腹の物ありし
あまれんといふに付き也此は某の恨
ふくまへ今も振ひて思ふはた様の魂
ありし物の用と云ふは二條を様と
ありし雜人と云ふは事平はせしは何
事なり科よりしては其の取付
ありしは信くはし付眼をみまはる

とゆはるや上りて
一 ちの吉村兵庫 語て曰某、古候軍一
武光平奮つといひ人 守表くりりし
道中いれられぬ中より 却り掛り
来てくると侍有又是も 亦くは上り方と登
侍ありしより遠く一方の 百とりの男何と
替るもいふとては方 ぬる奴もいざ人
いひて且那度りく 下されよとま
いふとて侍も せぬとてりて なる物候

あらませ 既に替人とせし 亦一方に侍候と
たへいせ 替るのさうに 叶ふはけりあり
いふ事、事、事、事、馬奴とに ぬれり立
てんせをる 宛前より侍と せよい
申る、持せよる 汝を 追えて 是か侍替る
事叶ふ、いふれ 某候 ありせし けり
一言の 挨拶。うく 亦をる、いふれ 之 武士の
法を、いふ、いふ、いふ、いふ、勝負を せん
既に 追掛りて せし 亦、平名、の、又、亦、い

少くをりけしるよりありてより死に
りつらるるおん石存いとも光千万
存く去るも只今の侍を去れ若し身な
左振し復と掛れかめりてより七
おもしろい故すまじ御の時ハ鷹との
お侍よりまら聆るる及久ハ必定は
拙者、様移とて是能くもひ中より
と替りおハ拙者、馬と心替り最
いハおハ赤い様移とて中ハ最人
は

近頃にくさ馬麻よのほしく共ハ自分換
の心不替りゆりてをりて人ハ
夫より武光の馬とて馬ハ別出とて
平右衛門お訓する侍も不意の喧嘩を
おろくお半らひい語れし

一 播州宗比城主中川修理宗成
中川清満 宗成の子 太閤秀吉公朝鮮征伐の前より
御馬を御りり帰船の節ハはるよき
入玉をとり上意せし朝鮮へ渡海せし

しとより力量せよと勇氣あふ人の
將うれと虎狩せしなりと後歩坊士
少くあらね近所の地へ出たひ
日本の難人といき人軍のよきしり伏
たれたる流布といふもおどと同や
此今唐人二人事り端々うさむるの
多の散るさしに途向うんと申川
度までくちかへん申る持せし長刀
たての区に波花せし追ひあはれぬ町

程々遊るよと已れ毛唐人のすすも
おどぬると大勢をうつといふちあまの
流のよき如くきしりく事付たひしん人
唐人申るよとてと對るるちちく
こみ付れと對るる矢うれいおま
申川度よりけりたれ共大別の大將
うれと對れよと地考くみの長刀を以て
二人も一難伏たりと強れ共は矢底油く
しと強し車去しとひりきと恙なく帰船

はらひもなほ自分の賞より多し
勇氣もなほ多し異色の地は一命を
あつとせんきとせしむ

一 古卷のちと武田北士徳と曰今付あり者事
中へ金銀して事の上にて批利は大きき事
事多しつと事いふ多しと事多し
是刀拵指のすし一強は利方なりとの
中へ血多しれ又草柄は血つとてす
おろしき柄の木は厚朴はる事

一 柳の木は終りのありきとあり侍もつと
のぬきまりと一汗服と事共と強の
すしと事血は偽ひ草柄はす程切合
働はるものいふと強き事又程強
お働く事いふに事及事事と事
柄の木は強く強ひはこまき事人の我
せと事いふ事血柄は偽ひ又
柄の強き程お働く強き事名々天下
つと事一巻の事いふ事と事

新産の血をいふは口と舌と今が吐
以下と口中とに括者今替く後度
くも宿汗の時とる用事一岸より
心と腹中と刀と死て三事。世に血痰
は向い血痰に今替くせめて吐く
血痰すといふし吐きえれ何の
まの血の中と何とていふ
い今替く吐く下とる。後
養者共とていふとていふ

血痰九部一とて物といふ
事七たといふと中とるは言
物とさうすといふ括括す
九部は物板と死といふ括
と捨主と刀とすといふ括
縮も括合といふとていふ
血といふ括外に付といふ
左のみの内といふ括
事といふ括

家より走り出ると三人とも負せしむ
後より一柁を持ちたる鳥居外記乃と
折て水神の御子ありと云ふも又野丸巻て
御子外記を討とらうと外記の疵廿二ヶ所道
と云ふ物語に三木園を築とて外記方の後施の夫
子光形より今時より付たる由の疵を改め
死骸を流す時と云ふ園を築とて身委細
お懐せしけし外記鴉子井上九郎の堀田加賀守
正盛の遺言より後百廿九流施後より付

信意按ずる長坂血染九郎の先祖
長坂彦次郎信正馬也 世徳院 号清原公
に侍て享祿天文の頃数度の勲切御
極め戦場に出ると云ふ血染九郎の事
事多しと云ふ致切や感 名多し
血染九郎と名付せりありし子孫
代々武切と稱してはまれせり高し
けし外記の付り 血染九郎信次
大沖君の血染と名付せりいし流

登用せられた位従六位下丹波守
多きれよ不意此事に倭に命と為れ
けりとのにんもくえんれ稲島長清に稲島
伊賀の子息少く孫に父祖の傳つてし
名人あり稲島伊賀に元来細川兼中守
屋^{忠無後}の家来之に奥方の執持しん
付まれば下り慶長五年石田治部
少輔三成の騒動の時依大名の人集り
大坂城中に在り人と評定付細川慶

奥方と一妻の在り人となり時奥方ハ
自害し孫ひ村添居り三人の家老
の内河小石見小笠原勝亦に腹掻切て
死にしよは稲島一人ハ大徳病の人元
親よよせり笑ひよ主君と捨てなれ
大徳病の思名とせりけり稲島
伊賀に孫に名をたて天下に及ぶ人
まけ計の思つておきても其程の名に
あつては名のおのすりや少くあつて

一 太閤秀吉朝鮮征伐の時奥州會津の領主
蒲生元孫守氏々太閤の御本陣肥前の
名古屋より陣の付道く祀友の如
大川西口二十里手前の関白をひりち
君入唐し強ひ侍人しよしやあ
旧来の武士強みく西供し侍るみち
よくと立侍るる川の関を越ると
陸奥の郡の関 各ところよる川の関
今とことと

と讀ておぼしめし下野の関といふぬいと
清く流る川のよし柳のなげをいふ
と尋侍るもも人遊むの上人
道きくせし柳をいふみちけしや
新古今の道のし清く流るる柳守
讀侍りしと思ひ出
今も又流るる川し柳蔭のよき
道きくせよ
と尋あめてけける程よあふまの

重義名將戰死所 至今一塚堆淺川
誰知霜刃默然意 梅露垂淡松但憐

松若故迹西く若く山丘く先年古くを死心
久く他山く住長侍善く山南地くより枯れくく
山南推来侍侍く清く何く下流く長く若く
依之唯今如初く未く是く也意所記く後身
く物持くく何付くく下くく為く山居恩く下所懐中
有合く有金子千足供佛前ゆくく上

貞享二己丑年十二月二日 橋成信

廣巖寺和尚

一
此はさくし自書せりし年の頃廿三四くお見えに
刀はくくしすくすの掃枝くくおのり何く用
とく事やとく人軍中おてく著くせ人あ
とく説くくたくく人古式く知もるすの云是
く医の道具おてるの是く換くたす時膳
く皮を切掃枝おてく糸く合て糸く入る
く痛治く用人く為の道具おてく語

け説可しらん又り子往古ハ大将家の
人ハとみ烏帽子とし引られハ主烏帽子
ヲ成押付れハ巾中ハ成振子振て是也
志ころや付さく難兵ハこれ取巾ハ
志ころや付さく難兵ハこれ取巾ハ

一
石橋源重とつる浪人の慶安四年の謀伐
義し由井正富丸橋太郎の義
正富太郎の巾の一柄をせん企修堂
の人云念せ江丸芝橋上吉の前は隠れ

御老中増上吉ハ萬福の時故法炮おて是れ
エトけ。のるお増上吉に於ては年忌の御法事
のり是れ天代のり日頃の持傍を晴る
忽ち目とせし待下り天命いつてく速く
そ三日前ハ忽ち海人の来り上り達
日頃ハ石谷長門守武清町在り時故
此故一更ハの海人を先とて捕ひの士
勝多のこは折向る捕人の若共の
押入て早速源重のり生捕る人ハ

和上忠人となゆまゝなりしに死する時
中上よりしるすに死流に赦免す。右後
所より後山赦免とあり。幸難者に存之共
也無拙者に心願ふに叶ひたり。其一人
あり。今もそのまゝに拙者死流に君の
心願と成拙者に心願あり。拙利より及ん
却て中上よりしるすに免南に行跡と
以故送西安元行りしに後難者存老
故に悦せしむ。死上は拙者なり。つ

一分にて言指重くして一生の事仕る
寛永廿年四月十日配取駿河今泉少
率去しり。小行寺八十六。泰雲院殿春寶
宗信大居士。馬の存りし。右
酒井備後守殿 酒井守忠重利 三刻の内
領地を願はむ。時知行所の百姓に侍後と
共有し。一代官先の以て庄屋に中付地頭
の名に指合上。急ぎ名を改む。其由中付
依之庄屋に事や度。中付の事なり。

百姓曾て是代許容せし某處に代へ侍奉
名あり奉りしハヒと文書中奉りハヒハヒ
指合て悪友と云殿様侍後身ハヒ智ハヒ云
代官店屋をハヒ中せと耳にも曾て聞ハヒ
侍後身殿ハヒ奉りハヒハヒハヒハヒ
主候侍後少て奉りハヒハヒハヒ百姓侍後
永ハヒ大名侍後少て奉りハヒハヒ侍後少て
指合ハヒハヒハヒハヒハヒハヒハヒハヒ
大將と云ハヒハヒハヒハヒハヒハヒハヒハヒ

一 石川侍前身ハ尾州大山の城主ハ慶長ハ奉
の秋石田治部少輔三成ハ一味ハ大山の城ハ没為
しハ越前ハ落りハ後洛ハのぼりハ島守ハの巻添
院ハ磐石ハ難攻ハ石河原林ハ是
池田三左ハ輝政ハ執ハハハ罪科ハ御赦免
有ハりハ是ハ大山の城攻ハの時本多三左殿正信ハ
ハ獲ハ合セハ後ハ島守ハ三左殿ハ宗林ハ合
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
今ハ就安ハ島守ハ宗林ハ墓ハハハハハ

の者うれしうなり、拙者や、岩俣川は、
小入とやて、段やまらう、山照魂より、
うは、山機嫌、一倍の山和増や、
山元三七、山元分別の、
武平段や、
生涯より、
情や、
由意多し

信意按する、三列士、
吉計、
時、
聖吉、
等

一向宗の一揆起りし、
せん、
是より、
我、
る、
吉良海、
大沖、
也、
散

敗少水地者十郎忠重は石川新十郎
討取を所他ハ大見友を即ち討て各名を
極む彼武平江次付まを路ひしハ討の
合致ありその後同十月一校寫上和田の
岩と破て忠清の城を夷る人多く
是上は和田と云りこみ是よりつかせん
夷る大久保一黨をせんし城を破り
程ハ大久保文節屋の屋忠俊合衆を名屋
忠世痛むと負ひ城を奪り上り

達せしハ御後浩とて忠清の城を御造
殺りし土屋玄州首井長を即ち先より
すんで六名のみ少く大を散しお残ひ
計略理ちまん一揆より返還討は討
神君決地よりすせりしとすも敢御肌
小ハをすしり渡邊中茂身録ハ四月
少く大割の譽ありしとすハ討一揆
一揆ハ中根嘉茂より熟りと云ん
すみ中茂と一揆討て合せ言ひせんと

突合し、互に濠投捨太刀を捨ておれり
秘術を以てするところ互に勝負交
せりしと、女方向退く所、精庵十郎并
中務と付九人と死に掛る。中務此父源朝
源を討つ。弘徳はすけ事しおれり、
精庵と付九人下。川流太師の弘徳は
付人と馳事。弘徳川澄に、目も血
汗君と目かけ、馳近く其甥内友
甚四郎の剣、死にし、夫死にす。

弘徳と兵と射。夫は、弘徳を
のちの強う、左の脇腹に射せしむる。
どうと伏し、子中務を死にせしむる。
うけ、敵場を引退く物れ、大軍は痛の
けられ、強の陣中。死に内友、甚四郎の
為る、伯父と射る。右の射りありしと、
夫は感賞を給り、又土屋長吉、御近
習ありし、一向宗門なる、一授し
給ひ、仲君の準備、及ん危と

死して一擧に向ひ家宗門の爲に君命に
背らざるに苦死すこと今も
君の徳に危しむ時、君の爲に付死せし
是に忠ありと云ひ捨て先人の徳に
七難八倒して死し、去りて後、
死の時、廿三歳なり、日する、英皇不
及ひし、一、支陣、身、引退く
大沖君石川日向守殿、後、
長吉死後と承り、せり日向守殿取

家来共の中付れ、程に家来等死後、
尋出上の和用、持来。沖君土屋に大
死の程を憐れせり日向守殿、
と尸の上の和用、葬らめ、
教養あり、
下、山家人の吉田を、
中、多し招かれ、
吉田の身折、
一人を、
文友の友ありし、

密に各屋の方へ收を送るは度もある
籠の下の軍勢はこれ先代信代お傳の
主君と捨て宗門のあま主君より
曳下く是武門の事なるは久し
幸に吉内より物の上の本多鶴谷
と少と誑言しり先代と悔ひ
あるに赦免とありと云ふは終
つて子孫長久の人といひ送る
吉田と屋の丸ありといひ本多より

いしは本多の子連因りす鶴谷中
身大久保の縁者たるより大久保
方より異見せしは鶴谷と先代
誤し本多吉田鶴谷等路細
以赦免とありしは一向坊主と
田中の一様等先より力と病し
路といひ厚免とあり上の和厚の陣
自今以後一向宗門と捨幕下
廟下自各起徳文と書國中平均

一 信長公自傍の事御秘苑の事
三つあり一は奥がうらう猷うらう
白ゆの鳥の光希氏の逸物あり一は
あまの百光の程はさるる石束砂
流と云ふありは放てもはまづくとも
事あり一は定の天百と云ふは
一三よの山小姓藤南丸にた切の
しりせは隠れありは三つありのすなはる
御秘苑の事ありは御秘苑の事あり

一 同一時代より小くは傳へるは古卷の
士流り

本綿友吉米又藤氏の在茶田のけ依る
藤吉とい秀吉公の山名ざうとありとい老
英麗あり物少きつらひも何れ用おれ
調法あり物少くはつては叶き老く
友吉い何れはつらひなてもはつらん自由
ゆて調法あり人物とい事と米又藤氏とい
丹羽藤氏の長秀の事ありは人の米中

一
同し事一ふてはくして時をぬく一と上下に
涙つて奇跡の人あり宋田と八幡理充揚成
り軍中でのつくりのよき人なり
勇氣あふ人の多し佐久智と平右衛門信
盛多しれき振の上のそあしとありし
古巻のまひし今奪れは代々の軍事一
つらざるれ戦場の事とその大なる事思ひ
ても夢てと知るは少なるもの却る事ある
皆今戦の時いさらんづとほくとも思ひ

一
たふつる人救押し時さらんづとらるる
常世の多し戦ふ時ハ皆是れありとのあハ
いふとあれハお働時ハ草鞋の中ハ赤砂を
と入る時降るて働りまされ皆是れは
はく多し信長公の越前金高今戦の時金
松又四郎はくして働る信長公は後を
大さし山賣次と女もともいふるは今戦の
付の鞘のいけん持せられ是れをたれとあつた
大将と名おふ用意ハ持りしは是れをたれと信長

一 播州網干龍門寺に盤瓠禪師を出世掃す
名僧ありて、まづ書に記すまゝに
いり状とて、まれりて、禪師父の之を
乱る大坂に籠城の人多し、落城の後播州
物申に警指して、かゝるる任長より、ま
改送る、然るに盤瓠家貧に、けんを
同國赤穂郡中村に、つたの中村法安とて、
医師のとき、知少の時を、公に出業割とて
指ひし、響風、卵めりちりあり、

法安より、つたに、はりて、思案をりし
夕ひ是、あまやま、ま、つた、ま、
龍瓠、つた、吉田治部卿とて、龍書の、門人、
あり、筆、道、成、修、り、せ、り、つた、
あり、人、洛、西、松、尾、高、の、三、言、の、古、境、に、来、り、
指、指、ひ、つた、或、時、何、事、の、つた、い、ひ、公、に、
は、り、ま、来、り、は、り、て、盤、瓠、を、た、ひ、て、
氣、性、と、つた、中、三、言、宗、を、修、り、
す、く、器、に、つた、福、永、を、入、て、ち、の、法、を、

あつ惜つとむくししとては公人の吹巻
よつくせより妙心寺の如くいん信んふ立
文字の法を初めてすめいしとていん信ん
仰りて如く同因赤穂郡中村といふ
下古の兵庫寺といふ伽藍あり今荒廃
しんていん信ん小倉の如くせよせよ信ん
平生の如く考へ掛垂頼文をいん信ん
庄頼しん信んせしといふ村の百姓共殊勝
の事いん信ん信んしん信ん白浪三下り程

調つて寄進せり去よりつては浪で妙心寺
といふ一交勅の如くいん信ん又如く考へ信ん
淀川といふいん信んいん信んいん信ん
浪といふいん信んいん信んいん信ん
いん信んいん信んいん信んいん信ん
近下居りていん信んいん信んいん信ん
百姓も是といふいん信んいん信んいん信ん
かくて観音講といん信ん月並に盤踞方
ありしといふいん信んいん信んいん信ん

可の虫是とらたてしき老と思ひ候く
昔せんにちりしし盤珠を却け老を
痛りし食を油の子少くくせしは
人こそ感しり或時庄友の家ゆく
壺子十枚失しし盤珠を疑ひ庄友に
盤珠を貰ふは人亦人として
依之候し信もあはし盤珠を
少しなふけりし老の庄友に
して我輩の目も里にけり候く
可

用事あり候しよの失し金子の
入るる袋にふまの思ひ娘の
つると思ふに候し方
金子入用事候し
候しは却る下まぬ
心こそ下りし
庄官たの思ふ
の恥しき事候し
盤珠を呼候し
候し

次々と語れ、盤瓠の事いしまゝ疑ふ解へ
一説は、昔ふらつゝある事あり疑ふ
事とされおのゝ意念ありて申来りて
りしと宣ひし、後此澤と去、又揚が中
村の房室と仰り任りし時、佐前長山の
城下三入と、宿院の院名、揚州赤松
のや所の遊鶴とありて、吾々の云申、和尙
の僧ありし人の、才子と云ふ人、と申ひ、因着
變じし侍老といふ、いひこみ、の云申、つゝい

永年裏つて、才子と云ふ、と申ひ、上
今、時中年に、て出家す、との、能法師、
故、ハ、あるもの、られ、て、用あり、と、宣ひ、因着、
言、る、人、の、又、老、も、あ、ま、す、と、申、家、は、と、
美、言、と、祿、宗、と、稱、り、常、り、能、法、流、の、能、
い、才子、は、能、故、依、り、は、度、よ、の、能、と、申、人、才、一
と、身、器、量、を、心、意、の、老、と、お、と、申、と、申、
抑、一、執、成、中、せ、と、物、の、入、つ、れ、来、り、
有、と、申、盤、瓠、の、事、を、對、面、し、て、い、ひ、戒

と寺老て教よりと叶ふね一安の一を
修好しるは佛前の利益に永力子あり
修の上六部附力とせんとれは修好す
とて名と永縁と付ひは方一宗の習ひ
法事をお勤る程の事とて、まゝと叶ふ
共八十法より勤る法義をお知りて上
にてハ衣袈裟とてゆふとて十法を勤
せざるは下より須道老元といふ唐僧
此をせざる是ハ院元禪師の定あは海より

日本よりある事叶ふは修好の帆
とては時唐僧末朝とてゆふは流の流僧
及び云甫和尚の流とて皆ハ長崎表く下られ
時永縁とてりりりひ四月八日ハ長崎
表来し是普業とてはれは善とてなる因
道老元立公今日釈尊にまじりてありは
とて各れ一句とて少人とては時を
おひひは氣とてけ染やとてふの付ける
とて各れ一句とて少人とては時を
とて各れ一句とて少人とては時を
とて各れ一句とて少人とては時を

出て候より一いちしりきと道共えの物く
授付二三問答せられしは道共え大なる稱頌し
真入りしは翌日祿堂の張紙より右の上座
永琢と書れしは永徳の和僧と是れなり
永琢と中老にいまも衣を必せしは中
上座は彼れ老よりいづれは出家され申す
にて席をわけし勅を老共しとて道共え
少りし日申す法之妻たる事一れ誰と
せよ有法の老より上よ三處をたて大流儀

叱しりしは後伊願とて和僧永琢と申す
引おろし一日問答の二三問答あり又も後七
和僧永琢と經堂より問答し道共え室寂
我情の和僧共ありて經堂靜々あり
幸我儀も寮有永琢は是れ我に勅
めよとて重なる經堂の席くおされり
永琢悟道教明をはりしは法とや
みりしは永琢の類をたてし書籍
代りしはしりしはたてしは

一 妻勃て搦がし何と〜その後江戶より
道忠元隨文三人とんと合せり泉州
篠田孫八和尚を一同に道忠元法侍の
友と寺社をり航まへ船をり〜時をじ
りはまより長崎より〜道忠元帰帆は
隨逐〜長崎い〜物々道忠元帰帆の
砌肥前平戸の城主松浦肥前守廣 無信
道忠元は尋らせ給ひる〜今和傳の内
新悟道とい〜たる偽りのやとのたま

道忠元の子搦洲の永祿といふ者なり
是を人光人と宣ふ是より松浦廣永祿を
首級ありは世の人にて盤城の徳氏
三行〜後後波丸龜の城主島極傳中守
廣 百豊二万
二十石 徳の介の首級あり搦洲に
与波再無り搦門者と号し是より
中〜とよりんよ金みりの道忠といふ
妙智より出世の事々中事〜隨文の航偽
す〜よりて名を盤城改再傳の法氏

勅られぬ後、妙心寺より天竺に達し
願中より、亦も禪師の号を仰り、日と
法入帰依、仰す。この言天の白鳥と名
か如し、流俗の随文す。このあのみを
はく、如し、綱干の御門寺より常一
僧流、六千人、或は百人、なて随文せり
遷化、又六寺の前より、千人の六流と
供養せり、説法し、終り、伊藤大洲
の城主加茂の村守、廣泰、兵士大なる徳を

帰依し、流俗の大洲より、一寺を建し、
此より、播磨の甲村の兵福寺の四跡を
究初悟道の地あり、再興す、
この儀、如く、地を川近く、
水難の悲し、此の京より、行かぬ、
赤穂の志守より、地を撰ひ、ひ近所の
山、春日谷と、所、京より、す、これ、は地
を、て、ら、う、て、兵福寺、再興す、

一 常寂三聖の塔、主、為、濃、守、廣、泰、寺、入、造、る

道長母と号し孫つるは人いま〜在俗の時
馬と号し平四郎と号し考あり〜元来三智の
産少下孫の考の子あり或時平四郎と
英濃守殿の考にたがひの考て英濃守殿
大と号し下孫といひ平四郎と号し擲せられたる
下孫の齒一つ折るる平四郎と号して遊するぬ
平四郎と号しはり〜
人ると生れあり〜下孫の勅とすれはる
下孫草履して擲せられたる高類の

同〜考為辨涉ま〜事共あり免南
人あり考れせよ用ひらる〜出處あり
のあり〜考あり出處とげはる
遊わんと号しあう〜出處始送〜
秋門より禪法と修り〜名傳子付し
後入る〜經山と住し〜後阿彌
英あり〜赴り松崎の円福寺と住り
殿に古の平四郎と号し〜知りたまひん
〜法の名と号し〜名傳子拓法〜

初て對面し流ひるる魚僧の山百卷の
くひて口取を侍りし平福の山麓に
山を子育き下流して山寺の山を口とく
多しまうと山をとげりて山今下流
山家致子終りて山悲生前の山恨紙
達し人流授て山月かけく人との
下流の山破れと山家入て山首かけ
くをえのくみせまの一首の詩を
待て曰

一住經山弄風花 飯來円福坐道場
法心覺了無一物 元足真筮平四節
濃洲大智の山を山印とて山梅
礼しとまうと山智の山月山を山福とて
建立しと山尚山任持職とて山教他
異ありしと

一
策え和為の山しと山時西湖凡常と山又と山策之
竹扶門外日將晡 多景滕駭一景無
語得雨奇晴好句 暗中探素識西湖

唐人の文を讀むに詩と感興ありけりといふ

信意 按ずるに増補華夷通考考す浙江

城下と杭州府とを春秋の時越の國と

南東と曰ふり上とて杭州府の西湖を

中華一才一の風氣とて黎陽の地なり

日今より杭州府より海上三百六十里

南東の南隣あり唐の世に明州と名け

古日本より渡来の私大官明州の

海より入つたりしに別寧波府の地と

田明州と寧波府なり天台山

浙江の台州府なり

西澤長清

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

し書実事の西女を摘出
つゆふも随筆之中の行
の書も随筆の中
しゆくすは書

4220
1



西澤長

